

# ニコラス・ローズにおける心理学と教育の関係性

## —「教育の心理学化」論への含意として—

牧野智和（早稲田大学大学院）

### 1. 「教育の心理学化」という問題設定

森 [2000: 9] は、「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人々に受け入れられることによって、社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向、社会的現象を社会からではなく個々人の性格や内面から理解しようとする傾向、および、『共感』や『あいての『きもち』あるいは『自己実現』を重要視する傾向』を社会の「心理主義化」と表現した。この森の議論は、斉藤 [2003] や檜村 [2003a] によって、その動向に心理学的知識と技法の普及が関わっていることから「心理学化」とも表現され、議論がなされた。両用語は必ずしも同一のものではないが、本報告では同義のものとひとまずみなし、「心理学化」という用語で事態を表現することとする。

森は「心理学化」が進行する先進領域として、教育の領域を挙げている [森 2000: 34-35]。確かに、森の指摘以前にも、私たちの教育や青少年に向けたまなざしが「心」を中心としたものになってきたことが指摘されている。例えば伊藤 [1996] は、いじめ問題の理解が社会や学校と結び付けられて論じられていたのが 1990 年代になって「心」による理解に取って代わられたことを述べていた。また酒井 [1997] は、児童生徒の理解が「カウンセリング・マインド」という和製英語の導入と共に、調査やテストから内面の理解へと変容したことを論じていた。

しかし、ものの見方の変化だけでなく、「心理学化」は政策や制度としても進行している事態でもあるといえる。その流れは大きく二つある。一つめは、いじめや不登校、非行対策として、非常勤の臨床心理士や精神科医、大学研究者らが小中高校に出向き、悩みを抱える児童生徒の相談を受け、教職員へのアドバイスを行なうスクールカウンセラーの派遣が 1995 年度から始まっていることである。1995 年度には派遣校数 154 校、予算規模 3 億円であった事業は 2005 年度には派遣校数は日本の全公立中学約 10,000 校、予算規模 47 億 2300 万円という規模にまで拡大している。

もう一つは「心の教育」である。スクールカウンセラーは 95 年 1 月の阪神大震災を受けての派遣開始であったが、「心の教育」が注目されるようになったのは、1997 年の神戸の連続児童殺傷事件以降のことである。既にそれに先行して、「幼児期からの心の教育」小委員会が 1997 年初頭に中間報告として「心を育てる場」としての学校という提言を行っていたが、事件を受けて小杉文相（当時）は中

教審に「幼児期からの心の教育の在り方について」を諮問、翌 98 年 6 月に答申がなされた。ここでは、凶悪化する少年犯罪を受けて「心の教育」をするべきという提言がなされ、こうした動きが 2002 年からの道徳の授業のために配布された『心のノート』という副教材の冊子の配布に結実している。

### 2. その議論の現状

とはいえ、この教育の「心理学化」に関する議論の盛り上がりはピークを去ったように思われる。2001 年の教育学会大会において課題報告研究として「心理主義化する社会と学校教育」が取り上げられたが [伊藤 2002]、それ以後このテーマに関する研究は続かなかったことにそのことは象徴されている。しかしながら、教育の「心理学化」に関する議論の収束は、このテーマに関して議論が十全に出尽くした結果と見ることができるだろうか。

確かに、教育の「心理学化」の果たす社会的機能やその帰結については、「心理学化」によって教育という営みの機能が社会化から自尊感情を高め、傷ついた心を癒すセラピーへと変化してしまうことを指摘した檜村 [2003b: 140]、心理学的な見方が自己責任を重視するために人々の間の社会的な不平等を見えないものにしてしまうと指摘した小沢 [小沢・中島 2004: 20-21]、青少年問題を少年の内面の問題とみなすことが、少年の「心の闇」をコントロールすることによって解決を図ろうとする「教育万能主義」を加速させたのではないかと論じた広田 [2003: 211-223] などの知見がある。伊藤や酒井らの指摘も同様に、心理主義的なまなざしが内在的にはらむ問題点を指摘していた。

しかし、教育の「心理学化」がなぜ、どのような構造、背景によって起こったのかという点については、言及されることは少なかった。現状では、教育学や哲学の立場から、あるいは教育現場の人々から言及される、「心理学化」と「国家」の繋がりという指摘が中心的であるように思われる。例えば金子隆弘 [2005: 92] は教材『心のノート』を『学校道徳』を支配し、子どもの『こころ』を支配していく超越的な教材「子どもの『こころ』を支配し、操作・誘導する心理的な手法が埋め込まれている（マインドコントロール）」と表現し、神道的な自然崇拝の重視や愛国心との関係を論じた。先に挙げた小沢 [小沢・中島 2004: 110-120] もまた宗教的情操や国家神道と『心のノ

ート』の関係を取り上げ、長谷川はこのような心理主義と国家主義の結びつきを「修身科」ならぬ「修“心”科」[小沢・長谷川 2003:20]として表現している。これらの論者に共通するのは、『癒し』『ケア』といったソフトなイメージを持つ心理学化という動向の背後に国家による道徳支配がある」という図式である。あるいはそれと関連して、教育の「心理学化」という事態の進行を、『心のノート』を監修し、また臨床心理士の資格化に尽力した精神分析家の河合隼雄氏の権力性や、特定の心理学者たちの事業精神から事態を理解しようとする図式を彼らは持っている（[小沢 2002:66-71]など）。

だが、このような図式は適切な事態の把握といえるだろうか。また、このような図式をもって、教育の「心理学化」の構造や背景についての回答とみなすべきなのだろうか。確かに、教育の「心理学化」と呼ばれる諸事態の進行において国家という存在は重要な働きをしており、また河合氏らの尽力も大きいといえる。しかし、「心理学化」という動向は、斉藤や樫村が指摘したような大衆文化における「心理学化」の進行や、若者のなりたい職業の上位に「カウンセラー」が位置し[斉藤 2003:2]、臨床心理士の資格認定者数も2006年4月現在で15,000人を越えるなどの例に見るような、人々が自発的に心理学の知識を我が物にしようとしている動向ではなかったのだろうか。教育における動向のみが、一部の「権力」に近い位置にいる人々の手によってなされたと考えるべきなのだろうか。報告者にはそう思われない。現在の教育の「心理学化」論において繰り返されている主張は、国家批判や特定集団の利害闘争の指摘に性急であるあまり、私たち自身がその動向を推進することに関わりあっているというという事態を軽視し、また適切に現状を把握できていないように思われるのである。

### 3. ニコラス・ローズにおける心理学と教育の関係性——家族と子ども期に関する言及から

このような疑問を出発点として本稿では、後期フーコーの観点を踏まえてイギリスにおける心理学と社会の関わりについて実証的な検討を行った、社会学者ニコラス・ローズの家族や子ども期に関する言及と、教育の「心理学化」論を比較することで、心理学と教育の関係性についてのよりよい認識と分析の枠組を提示することを目指したい。

ローズにおける言及のポイントとなるのは、心理学という把握の難しい対象をドンズロ[Donzelot 1977=1991]が提示した「複合体 complex」という理論・方法論的視点を手がかりに捉えようとする点にある。様々な実践的手続きの集合であるこの「心理学的複合体」が、フーコーが述べたような特定の「主体」を生み出すという観点から、ローズの具体的な言及は紡がれていく。

ローズの議論の詳細は当日報告するが、報告者はローズの記述したイギリスの動向について、「心理学を活用する

のは誰なのか?」「心理学が活用される文脈、条件とは何なのか?」「心理学の『イデオロギー性』をどう捉えるべきか?」という三つの観点から整理し、日本における議論との比較を行っていく予定である。

### 【参考文献】

- Donzelot, J. 1977 *La police des familles*, Paris : Editions de Minuit. (=1991 宇波彰訳『家族に介入する社会 近代家族と国家の管理装置』新曜社)
- Foucault, M. 1978a "La 'gouvernementalite'", in *Dit et écrits III*, Paris : Gallimard. (=2000 石田英敬訳「統治性」蓮實重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成Ⅷ 1979-81 政治/友愛』筑摩書房)
- 広田照幸 2003 『教育には何ができないか 教育神話の解体と再生の試み』春秋社
- 伊藤茂樹 1996 『『心の問題』としてのいじめ問題』『教育社会学研究』59、21-37.
- 2002 「課題研究報告 心理主義化する社会と学校教育」『教育社会学研究』72、257-259.
- 金子隆弘 2005 『『心のノート』と『こころの支配』 柿沼昌芳・永野恒雄編『SERIES「教育改革を超えて」4 心と身体を操られる子どもたち』批評社
- 樫村愛子 2003a 『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房
- 2003b 「心と教育 教育の心理学化…あるいは mediation としての幻想と転移の倫理学」『現代思想』31(4)、139-149.
- 森真一 2000 『自己コントロールの檻 感情マネジメント社会の現実』講談社
- 小沢牧子 2002 『「心の専門家」はいらない』洋泉社新書
- 小沢牧子・長谷川孝編著 2003 『「心のノート」を読み解く』かもがわ出版
- 小沢牧子・中島浩壽 2004 『心を商品化する社会』洋泉社新書
- Rose, N. 1985 *The Psychological Complex: Psychology, Politics and Society in England 1869-1939*, Routledge & Kegan Paul.
- 1999a *Governing the soul: the shaping of the private self* (2nd ed), London: Free Association Books.
- 斉藤環 2003 『心理学化する社会』PHPエディターズグループ
- 酒井朗 1997 『「児童生徒理解」は心の理解でなければならない』——戦後日本における指導観の変容とカウンセリング・マインド 今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか 教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社